

いこいのみぎわ

No. 43

2021年1月3日～1月9日 各家庭でのディボーション用テキスト

[なんじ疲れしや なんじもの憂きや]

なんじ疲れしや なんじもの憂きや
なんじいたく悩み苦しむや
「われにきたれ」と主はのたもう
「われにきたりて休みを得よ」と

主もしわが導き手なりせば
いかなるしるしもて導かるるや
「御手御足に傷のあとあり
またその脇にもあり」と

君たる者の頭を飾る
冠など主は持ちたもうや
「しかり げに冠あり
されど そはいばらの冠なり」

もしわれ彼を知り 彼に従わば
いかなる報いを受くべきや
「労多くして悲しみ深く
涙流すこと多からん」

もしわれ終わりまでみそばを離れずば
われいかなるものを受くるや
「労終えて悲しみは消え
ヨルダンの流れを渡るを得ん」

もしわれを受けたまえと言わば
なんじ否とのたもうや
「天地の過ぎ行くまでは
主は人を拒むこと 絶えてあらじ」

主を知り 従い 道を守りて戦い抜かば
主は必ずわれを祝したもうや
「聖徒も使徒も預言者も さらに殉教者さえも
口をそろえて答えて言わん しかりしかりと」

聖ステパノ
(八世紀)

■身体的ハンディキャップにおける訓練(1/3)

足なえさえも獲物をかすめ奪う。(イザヤ 33:23)

身体的なハンディキャップを通じての訓練、すなわち試練ほど、人間の心の奥深くまで食い入るものは、ほとんどない。疑念、落胆、中傷、絶望、あるいは病気でさえも、この身体的なハンディキャップほど深く心に食い入りはしない。常に欲求不満と不安に付きまとわれ、生きること自体がばからしく、無益なことのようになんと思われてくる。しかし、至高者なる方は、限りないやさしさと慈愛を込めて言われる。「弱った手を強め、よろめくひざをしっかりとさせよ。心騒ぐ者たちに言え。

『強くあれ、恐れるな。見よ、あなたがたの神を。復讐が、神の報いが来る。神は来て、あなたがたを救われる。』そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけられる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ」(イザヤ 35:3-6)。

バイロン卿は、身体的なハンディキャップのゆえに苦悩したことについて、こう述べている。

「不幸な母は、毎日のように私を激しく叱りました。時には、あまりひどい扱い方をするので、母は気が狂ってしまったのではないかと思われるほどでした。特に、母が私の足が不自由であることをなじって、ひどくせつかんしたときなど、私は母の前を逃れてひとりきりになり、だれも見えていない所で、じっとこらえていた怒りや屈辱を一度に爆発させたものです。そこでじっと考えているうちに、神の摂理の不公平さに対する不満がいよいよ募り、自分の不自由さをののしるのでした。それは全く苦々しい経験でした。今でもそのときの有様が、はっきりと目に浮かんできます。こうして、生まれつき愛情に満ちていたはずの私の心はむしばまれ、元気にあばれ回ろうとする気力さえくじかれてしまいました。「欠けし者変えらる」の着想は、このころ抱いていた感情から得たものです。こうした子供のころのことをよく思い返してみますが、そのころの私の感情は、今でもあきれほど強烈でした。第一印象というものは、ぬぐい去ることのできないものです。不幸な母をはじめとして、学校の友だちが皆ばかにするので、私は自分の足が不自由であることを、最大の不運と考えるようになってしまいました。いまだにこの感情に打ち勝つことができません。身体的なハンディキャップが心に植え付ける有害な苦々しさに打ち勝つためには反省することも必要ですが、生まれつき善良な人間ででもなければ、とうてい不可能なことです。こうした苦々しい心は、本人を苦しめ、むしばむばかりか、世の人々すべてに対して苦々しい思いを抱かせるものです。どんなに顔の美しい人でも、何か身体的な障害があると、それがきっと顔に表われると、ある本に書いてあったのを読んだことがあります。その本の著者はきっと、人は自分の欠陥を常に意識していると、顔にもその不満が習慣的な表情として刻まれてしまう、ということを言おうとしているのでしょう。確かにそのとおりだと思いますが、しかし（とバイロンは苦い顔をして付け加えた）、片足が正常でないからといって、まともな心を持つことができないとは、実に残念なことです。」

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第九章「身体的ハンディキャップにおける訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。